

一代

有馬頼義

貴三郎一代

三八〇円

著者◎有馬頼義ありまよりちか

発行者 上林吾郎

発行所 株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三

昭和三十九年十二月二十日 第一刷
昭和四十一年十月二十日 第四刷

印刷 凸版印刷

製本 大口製本

万一落丁乱丁がありましたらおとりかえします

Printed in Japan

貴三郎一代 目次

貴三郎一代 5

兵隊と馬と虱 23

裸の街 41

歩く 58

公用腕章 76

おんな 92

冬將軍隸下 110

臍酒 128

告白 144

遺骨宰領 163

走れ、貴三郎 181

営倉 197

白夜 216

賭ける 235

装
幀
岡
本
半
三

貴三郎一代

貴三郎一代

一

大宮貴三郎が、どこで生れ、どういう風にして育てられたのか、私はきいていない。きいたとしても、私は忘れただろうし、私の中の大宮貴三郎の生存には、そのことは、多分必要がないのだ。初対面は、昭和十七年の一月末であったが、その一カ月前に、私は一方的に、大宮貴三郎のことを、少しばかり知らされた。場所は、北満の孫呉^{そご}で、中隊へやって来るその年の初年兵の名簿が、出来上ったときであった。うすぐらい下士官室へ、私が呼ばれて行くと、内務班長と、その年二年兵になったばかりの初年兵掛上等兵の二人がいた。

「相談がある」と軍曹が云った。

その軍曹は、私と同年兵の乙幹^{おつかん}であった。人のいい男であった。

「何ですか」と私はきいた。

「一月に、初年兵が来る。おれの内務班で、六人の初年兵をひきうけることになったが、この中に、

「とんでもねえ野郎が一人いる。大宮貴三郎という男だ」

「とんでもねえ、とは、どういう意味ですか？」と私はきいた。

後になって考えると、軍曹が、そういう云い方をしたことが、私と、大宮貴三郎を、特別に結びつけたような気がしてならない。

「つまり」と軍曹は云った。「手に負えない奴だ、ということがわかった」

「どういう風に、手に負えないのですか」

「軍隊を、軍隊と思っていない、そうだ。つまり、上官を上官と考えていない、ということだ」

「しかし……」

「留守隊で手を焼いている。そいつは、腕力があって、地方で、よくない商売をしていた」

「貴族だろうと、泥棒だろうと、此処では一緒ですよ」

「そういう悪い奴とも違う。まだ、よくわからないんだがな。つまり香具師やという商売だ」

「縁日の？」

「てきや、と云った方がいいかな」

「それだけじゃあ、悪い奴とは云えない」

「身上調査しんじょうを見せてもいいんだが、——前科はない」

「問題ないじゃありませんか」

「留守隊では、下士官を投げとばした。徹底して云うことをきかないそうだ」

「要するに、要注意者ということですね。しかし、それで、営倉へも入れられなかったんですか？」
「初年兵だし、兵員は今、いくらでもほしい」

「それはわかってるが、——何故、自分を呼んだのです？」

「その男を誰の戦友（単に、日常隣り合って起居をするという意味）にするかということが、問題になった。准尉殿や、隊長殿の意見では、一番腕力のある三年兵につけろということだった。しかし、おれは、違った」

「……………」

「頼まれてくれないか」と軍曹は云った。

「頼まれれば仕方がない。引きうけましょう」

「大宮貴三郎について、何かわかったら知らせるよ」

「それは無駄です。来てから、会うだけで結構です」

「初年兵掛が、手を焼くだろう」

「協力します」

「すみません、上等兵殿」と、一年下の初年兵掛の上等兵が私に頭を下げた。しかし、そんなことは、どうでもいいことであつた。

年があけて、一月十日に、新しい初年兵が、東京の留守隊を出発した、という電報がはいると、四年兵の内地帰還準備が、はじめられた。孫呉の駅で、やって来た初年兵と、帰って行く四年兵が、入れかわりになった。一月末の、雪の日の払暁であつた。私たちは、その日、四時に起き、四年兵を送り、入れ違いに、初年兵がやってくるまでの、短い時間に、班内を片付けたり、初年兵の名札を方に貼ったりした。私のとなりには、空の藁蒲団が横たわつた。

一月の国境は、七時頃にならないと、明るくはならない。初年兵が到着したとき、兵舎には、まだ

電灯がついていたと、私は記憶している。私は、寝そべっていた。そして突然、あたりが騒々しくな

り、若者の声が、鳴り響いた。初年兵掛は、もう気合を入れていた。

「声が小さい。もう一度」

もう忘れてしまったけれども、同じことを、私自身も、はじめてそこへ来たときは云わせられた。

「陸軍二等兵、何の某、唯今到着いたしました」ぐらいのところだろう。すると、寝ころんでいた私の同年兵の一人が怒鳴った。

「初年兵掛。実行報告はやめさせろ。まだ起床前だぞ」

「はい」と、初年兵掛の上等兵は返事をしてから「よし、初年兵、黙って、自分の寝台に装具をおろせ」

軍隊の馬鹿々々しいところは、どんな規則でも、いつだってふた通りに解釈出来ることだ。班によつて、初年兵掛の態度が違い、せつかく自分の班を静かにしても、隣りの班では、初年兵が、大声をはり上げてわめいていた。

私はそのとき、ごろりと、隣りの藁蒲団の上に、装具が投げ出される音をきいた。

「大宮」と、すぐに声がかかった。「静かにしろ。隣りの上等兵殿は、まだおやすみだ」

「いいよ」と、私は云いながら、大宮貴三郎という初年兵の方を見た。これが、大宮との出会いであったが、一口に云えば、大宮は、熊のような男であった。肥っている。しかし、目はまるかった。まるい、というよりも、ぎょろりとしていた。大宮は、ちょうど、田舎から出て来た無骨な青年が、駅の待合室の椅子を見つけたように、持っているすべてのものを、そこにほうり出し、隣りに寝ていた浮浪者でも見るような目つきで、私を見たようであった。

「大宮か」と、私が云うと、大宮は、意外にも、とっさに不動の姿勢をとり

「大宮貴三郎であります」と答えた。

その次に私が、大宮を見たとき、大宮は、藁蒲団の上に、古参兵のように大胡坐をかいて、煙草を喫っていた。

「大宮！」と、初年兵掛が飛んできたとき、私は、制した。

「勝手にさせろ」

二

全く、大宮貴三郎は、古参兵や、下士官の手を焼かせた。彼等が一樣に困ったのは、びんたの痛さが、大宮には、全然通じていなかったことだ。かりに初年兵が、どんなに気をきかしてよく働いても、びんたを逃れることは出来ない。しかし、大宮を殴りつけた上官の殆んどが、あとで、手を撫でた。

大宮の首や、筋肉は、まるで鉄骨でもはいつているようにかたく、痛まず、逆に、殴った人間が手を痛めた。しかし、それより、上官達のかんにさわったのは、殴られることを、大宮が、少しも苦にしていないうことであった。殴られているとき、大宮の、ぎょろりとした大きな目は、上官を睨みつけ、

表情は、笑っているように見えた。部隊では、げん骨と、平手のびんた以外は、——私が二年兵になった年から、禁じられていたために、大宮を、痛い目に合わせるためには、誰も見ていないところで、角材か何かで殴るより方法はなかったのだが、人目のないところで、大宮は、殴ろうとする人間の腕をつまんだ。大宮は、つまんだだけだと云うが、つままれた方の腕には、青痣あざが出来た。しかし、初年兵としての大宮は、必ずしも出来の悪い初年兵ではなかった。気が向けば、仕事をどんどんしたし、

演習にも精を出した。しかし、気が向かないときは、徹底的に上官に抵抗した。

「入隊するまで、何をしていた？」と私が大宮にきいたのは、夜、消灯になってからであった。

「上等兵殿は、東京ですか？」

「そうだ」

「新宿から、四谷見附まで、露店が出ていたのを覚えていますか？」

「覚えているよ」

「新宿の親分の命令を受けて、その露店のショバ代を徴発して歩くのが、自分の商売だったのです。親分の用心棒をかねて」

「面白いことがあったか」

「女の子をね」と、大宮は、闇の中で、舌なめずりをして云った。「共同便所へ連れて行って、強姦したことがあります。そのときは、さすがに、膝が、がくがくしました」

「喧嘩は？」

「しょっちゅうです」

「どうして、てきやの仲間にはいった？」

「浪花節語りになりたかったんです。しかし、一年と、師匠のところはつとまらなかった。破門されました」

「今度の演芸会のために、聞かせてもらおう」

その演芸会の夜、大宮は、いいのどで浪花節をうなったのはよかったが、久しぶりにはいった酒で、荒れた。荒れはじめると、手がつけられなくなった。大宮は、机や椅子をへし折り、ベチカの中に投

げ込んだ。初年兵掛が殴りに行って、はねとばされ、内務班長まで出て来たが、ごぼう剣をふりまわされて、逃げまどった。初年兵掛が、准尉のところへ知らせに行ったあとへ、私が戻った。大きな、ぎょろりとした目が、すわっていた。

「大宮！」と、私は呼んだ。

実に不思議なことが、そのとき起った。私にだって、それが何故起ったのか、わからなかった。大宮は、大きな目で私を見たが、そのとき、大宮の岩のようなからだから、何かが抜け落ちたようであった。

「馬鹿なことをするな」と、私は云ったが、初年兵掛の上等兵や、ほかの古参兵をよせつけなかった大宮が、もし私に楯をつく気なら、それは実に何でもなかった筈である。私は、こわごわであった。すると大宮は、突然、しおしおと、自分の寝台のところへ戻り、ごろんと寝ころがり、大いびきをかきはじめた。准尉が来たとき、大宮はもう正体がなかった。

「どうしたんだ」と准尉は云った。「大宮が、どうかしたのか」

「何でもありません」と、私は答えた。「少し酔っただけです。自分が責任を持ちます」

もしかりに、准尉が、荒れている大宮を、何とかしなければならなくなったら、准尉は、軍刀を抜くより仕方がなかっただろうと思う。大宮は、ますます、たけり狂い、あるいは、逆に准尉の軍刀を奪って、准尉を切り殺したかも知れない。

「馬鹿なことをするなよ」と、その晩遅く、私が云うと、大宮は、図体に似ず細い声で「すみませんでした」と云った。私は、大宮貴三郎について、自分が、どういうわけか、特別な関係に立たされたことを、考えないわけにはゆかなかった。

大宮はしかし、また事件を起した。初年兵の、最初の外出日であったから、一期の検閲が終つて間もなくだったと思う。大宮の外出については、特別な考慮が払われ、大宮と、比較的仲のいい同年兵と、二人一組にされた。しかし、午すぎには、大宮は、相手をまいてしまったようであった。同行の初年兵が、衛兵所へかけ込んだために、さわぎが大きくなった。大宮が、街の芸者の部屋で、泥酔して、乱暴を働いている、という報告が、中隊にはいった。班内であばれている分には、内聞に出来るが、外であばれたとなると、師団の巡察将校の耳にはいる。そうなると、連隊長の責任問題であった。中隊長は、すぐに、私を派遣した。しかし私も、今度は、駄目だろうと思った。

大宮貴三郎が登楼したのは「いろは」という日本人芸者の家で、そこは、兵隊は、はいってはいけないことになっていた。大宮は、部隊に近い兵士ホームで、かなり酔っていたというから、その家の入口で

「兵隊さんは駄目よ」とか何とか云われて、逆上したに違いない。私が「いろは」へ行ったとき、小女が、窓ガラスの破片を集めたりしていたから、大宮は、相当あばれたに相違なかった。

「大宮という兵隊は、何処へ行った？ 部隊の者だ」と、私が云うと、やり手ばあが出て来て、にやり、と笑った。

「帰ったのか」

「いますよ」

「中にか？」と、私は、びっくりした。

「寝ていますよ」と、ばあは云い、黄色い歯を出した。「金を払ったから、上げましたよ。初年兵らしかったがね」

「何処だ」

「一番奥です。音丸という妓の部屋です」

私は、躊躇していなかった。巡察将校に見つかる前に、大宮を、部隊へ連れ戻すのが、私の役目であった。襖をあげたとき、私は、息をのんだ。

大宮は、全裸で、妓は半裸で、脚をからみ合ったまま、二人とも、大いびきで眠っていたのだ。

「大宮」と云いかけて、私はその言葉をのみ込んだ。

大宮は、いつもの、ぎょろりとした目玉を持っていなかった。腹が、小山のようにふくれ、上下していた。目玉のない大宮の顔は、まるで子供のように見えた。妓が、母親が子供に添寝をするような恰好で、片手を、大宮の背中になわしている姿も、いじらしいと云えば云えたようである。私は、その意外な光景を見て、出端をくじかれたと云って云えないことはない。

「いひひ」と、私の肩のところで、ばばあが笑った。「十円くれたからね。結構酒ものめた筈だ」ばばあの云う通り、長火鉢の猫板の上に、徳利が五本程、ひっくり返っていた。その部屋で、大宮が狼藉を働いた様子はなかった。

「最初、玄関で、あばれていましたよ。したら、音丸が出て来て、あたしにまかせろというんで、まかせたんです。音丸は、此処では姐御でね。たいていの兵隊の扱いには、馴れています。どうしますか。起しますか」

「少し寝かせておこう。ひとまわりして、また寄って、部隊へ連れて帰る」

「こういう兵隊は、頭ごなしに叱っちゃあ、駄目ですよ」と、ばばあは私に云った。

私は、近くの饅頭屋へ寄って時間をつぶし、一時間してからまた「いろは」へ行った。

音丸の部屋の中は、さっきと少しもかわっていなかった。私は、大宮の足を蹴飛ばした。

「起きろ」

「……………」

妓の方が先に目をさまして、大宮を起した。

「何だ、出入りか」と、大宮は起き上り、私を見ると、ぎょろりと大目玉をむいた。「何が起ったんです」

「何が起ったじゃない。お前のおかげで、連隊長が蒼くなっているぞ。帰ろう」

大宮は、私を見、妓を見、今、自分が置かれている状況を判断するのに、かなりの時間を要したようであった。大宮はそれから、にやりと笑って

「金が、まだ余っている筈だ。上等兵殿も、どうですか」と、妓を指した。

「共同便所は、ごめんこうむるよ。早く支度をしろ」

大宮は、私が、無理矢理に大宮を外へ連れ出そうとすることに不満のようであったが、道を歩き出したときに

「共同便所はひでえや。あの妓は……」

「わかったよ。その話は、今晚聞かせてもらおう」と私は大宮の口を封じた。

三

半年たって、私は、酒がいけないのだ、と考えざるを得なくなった。少くとも、酒のないところでは、事件は起らないようであった。酒をのんでいないときの大宮貴三郎は、少しばかりかわった兵隊